

氏 名 (本 籍)	さい とう こう じ 齊 藤 耕 二 (東京都)
学 位 の 種 類	教 育 学 博 士
学 位 記 番 号	博 乙 第 100 号
学 位 授 与 年 月 日	昭 和 57 年 7 月 31 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
審 査 研 究 科	心 理 学 研 究 科
学 位 論 文 題 目	パ ー ソ ナ リ テ ィ 判 断 の 実 験 的 研 究
主 査	筑 波 大 学 教 授 教 育 学 博 士 加 藤 隆 勝
副 査	筑 波 大 学 教 授 教 育 学 博 士 高 野 清 純
副 査	筑 波 大 学 教 授 教 育 学 博 士 松 浦 義 行
副 査	筑 波 大 学 助 教 授 堀 洋 道
副 査	筑 波 大 学 助 教 授 門 脇 厚 司

論 文 の 要 旨

(1) 本研究の意義・目的

他者もしくは自己のパーソナリティについての判断は、対人行動の基礎として古くから注目され、さまざまな視点からの接近がなされてきた。しかしながら、パーソナリティ自体の複雑さに加えて、パーソナリティ判断の過程には対象者と判定者のそれぞれのパーソナリティが関与することもあって、実験的研究がむずかしいものとされている。

これまでになされた研究の成果を展望してみると、①パーソナリティ判断についての測定法が研究者によって異なること、②一般にパーソナリティを判断するための手掛りが言語的に呈示されていること、③判定者の側の要因のみが重視されていること、などの問題点が見出され、新たな観点から吟味する必要性が認められる。

本研究では、以上の点をふまえて、まずパーソナリティ判断の包括的測定と研究結果の比較可能性を保証するために、新たなパーソナリティ判断尺度の作成が試みられている。次にその尺度を用いて、対象者を視覚的に呈示した場合の外面的手掛りとその呈示様式がパーソナリティ判断に及ぼす効果を明らかにするとともに、パーソナリティ判断の安定性や正確度等の規定要因を対象者の特質と判定者の特質の両面から実験的に検討し、統計的に詳細な分析を試みている。本研究はこれによって、他者理解の特質とその成立過程の解明に寄与しようとするものである。

(2) 本研究の成果

本研究によって得られた主な成果は次のようである。

① パーソナリティ判断尺度の作成

日常場面でのパーソナリティの記述が、特性語を用いてなされることが多い事実に着目して、188名の大学生を対象に、「自分」「友人」「きらいな人」の3種のパーソナリティの記述を求め、どのような特性語が使用されているかを検討した。これによって明らかにされた特性語の使用状況を基盤として、25対の特性語によって構成される「パーソナリティ判断尺度」が作成された。本尺度の妥当性、信頼性等が吟味された結果、対人知覚の基本的次元を含むことが示され、パーソナリティ判断測定のための有用な手段であることが確認された。

② パーソナリティ判断の規定要因

大学生から選択された男女各4名の対象者（刺激人物）のステール写真と映画をビデオテープを利用して被験者（判定者、男女各16名の大学生）に呈示し、メガネ着用、呈示様式、対象者の性、判定者の性など、実験的に操作可能な要因を変数とし、これらの効果を「パーソナリティ判断尺度」を用いて検討した。その結果、被験者の性及びメガネ要因にもっとも多くの有意な効果が見出され、判定者の属性や対象者の外面的手掛りがパーソナリティ判断において重要な要因として作用していることが明らかにされた。

③ パーソナリティ判断の安定性と測定条件の影響

前述の実験条件のもとで形成されたパーソナリティ判断の時間的安定性と再測定条件の影響を検討するため、189名の被験者を4群に分け、3週間の間隔において対象者についてのパーソナリティ判断を反復して行わせた結果、再測定条件によって安定性に変化がみられた。安定性の指標として相関係数が用いられたが、同一条件の反復、メガネ条件の変化、呈示条件の変化、メガネ・呈示両条件の変化の順に安定性が低下する傾向が認められた。

なお、自己のパーソナリティについての判断の安定性と比較すると、実験的条件のもとで、制約された情報を基礎として形成されたパーソナリティ判断の安定性は有意に低いことが示された。

④ パーソナリティ判断における自己判断と他者判断の関係

対象者が自らのパーソナリティについて行った判断（自己判断）とその対象者について他者の行った判断（他者判断）の間の関連を検討するために、両者の間のずれを測定した。このずれは判断の正確度を示す1つの測度となる。対象者数及び判定者数は前述の②と同じである。

その結果、もっとも多くの有意性を示した要因は対象者の性であり、判定者の性やメガネ要因はごく少数の尺度で有意であるにとどまった。

次に、パーソナリティにおける類似性と正確度の関係を検討するために、対象者、判定者それぞれに標準化された性格検査を実施して客観的類似度を求めるとともに、「パーソナリティ判断尺度」の自己評定に基づいて現象的類似度を求め、この2種の類似度と正確度との間の相関係数を算出した。その結果、客観的類似度は正確度と無相関であるのに対し、現象的類似度は

正確度と低いが一貫して有意な相関を示した。このことは、対象者のパーソナリティに関する正確な判断の基礎となるのは、判定者と対象者間の客観的類似ではなく、意識された自己像間の類似であることを示唆している。

⑤ パーソナリティ判断における一貫性と一致度

パーソナリティ判断において、判定者が異なる対象者に対しても同一もしくは類似した判断を繰り返す傾向を一貫性と呼び、異なる判定者が同一対象者に対して行った判断間の一致度との比較がなされた。判定者は185名の大学生である。その結果、判断の一致度に比べ一貫性は低く、判定者は対象者のパーソナリティを十分に弁別していることが確認された。

審 査 の 要 旨

いわゆるパーソナリティ特性によって、パーソナリティを記述し分析する立場は特性論と呼ばれている。従来のパーソナリティ判断研究の多くはこの立場をとっているが、どのような特性語を用いて記述し分析すべきかについての吟味は十分なされておらず、特性語の選択は研究者個人の洞察力にまかされていることが多かった。このため、研究成果の一般化や、研究相互の比較考察が困難な状況にあった。本研究では、パーソナリティ判断における特性語の使用状況を基礎として、解釈の一義性、代表性、出現度数等の基準に照らして特性語を選択し、パーソナリティ判断についての包括的測定を可能にする有効な尺度を作成している。これは本研究独自の成果の1つであり、今後のパーソナリティ研究に寄与するところが大きい。

また本研究では、パーソナリティ判断の規定要因として、対象者側の要因、判定者側の要因及び対象者―判定者間の関係がどのような効果をもつかについて実験場面を設定して分析を行い、性やメガネ要因等の影響を明らかにしている。さらに、パーソナリティ判断の正確度の概念を導入して、その規定要因についても検討している。これらのことは、従来から研究の重要性が指摘されながらも、実証的な検討が困難なため未解決のまま残されてきた問題であり、本研究で用いられた方法及び研究成果は、従来の研究成果を大きく前進させるものとして高く評価される。

ただし、このような評価にもかかわらず、なお検討すべき課題も残されている。たとえば、本研究においては判断の対象となる個人のサンプリングに制約があるので、結果の一般化にあたっては慎重にすべき点が含まれている。また、本研究ではパーソナリティ判断の規定要因として性やメガネ要因を取り上げているが、このほかにも重要な要因がいくつか存在するものと考えられる。この点についての考察は十分とはいえず、今後さらに詳細な分析が必要である。

しかし、本研究は基礎的実験的研究として大きな意義をもっており、今後におけるパーソナリティ判断や対人知覚の研究に対して多くの示唆を与えるものと認める。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格があるものと認める。